



私は、幼いころから音楽が大好きで、ピアノを長年習い、物心ついた頃は、ジャズや黒人音楽、ブラジル音楽に夢中でした。そんな私の心が突然韓国音楽にひきつけられたのは、池成子先生の、アリランのカヤグム生演奏を初めて聞いた時でした。その後先生に習うようになりました。先生とのレッスンでは五線譜は一切なく、口承伝承のみで行なわれる日々の稽古に戸惑いました。弄絃（ノンヒョン）（\*1）で、音が思うように表現出来たときは、とても嬉しく、キン散調（\*2）を弾きこなすまでには、長い歳月が必要でした。

●日本の琴と韓国のカヤグム

琴もカヤグムも胴体は、桐の木で作られています。琴柱は象牙、琴柱にあたるアンジョクは栗の木です。絃は絹で琴は13絃、カヤグムは12絃です。

高温多湿の日本で、カヤグムを弾くには、絃の調整、管理がとても大事で重要な作業になります。琴の絃はもと糸絹ですが、最近の

# 私のカヤグム

張理香



し日本の風土ではそうすると絃が切れやすくなります。それでナイロン絃が出て来たのではないかと私は、思っています。

私は、カヤグムの絃は、切れる直前まで、大事に使いきります。それは、新品の絃と弾きこなし古いた絃では、はつきり音色に違いがあるからです。

カヤグムの絃は、とても高価なので大切に使うという理由もあります。が、何よりも、新しい絃の音色より、弾きこなし慣れた絃の音色のほうが、はるかに音色に暖かみがあり、私の好みの音色になるからです。

私の目指す音色は、暖かく、優しく、木の香りのする音色です。

カヤグムと琴の音色の違いは、日本の琴よりも大分緩く弦を張ること、カヤグム奏者の命とも言える左手の弄絃（ノンヒョン）で自由自在に感情を深く表現できること、右手に爪を付けず素手で音色に変化をつけることができることによると思っています。

●宮廷カヤグム

韓国の宮廷音楽（正楽）は、約千年の歴史があります。

民俗音楽の散調を追求していくにあたり、正楽カヤグムの必要性を感じていた私は、運良く、李王職\*（\*3）雅楽部の最後の宮廷楽師、李昌ギユ先生に出会い先生の存命中約10年間正楽カヤグムを師事することができました。

現代の国楽教育の中では、正楽と民俗音楽を両方勉強しますが、宮廷音楽一筋だった先生の音は、私を知

る正楽（現在の国楽院で演奏される正楽カヤグム）とは、全く違う響きでした。

その音色を聞いた時の衝撃は、今でも忘れることが出来ません。

それは、カヤグムの胴体が、泣いていて、なんとも切なく深い音で、全身全霊でカヤグムを弾いていた先生の姿がその後私のカヤグム散調を弾く時の弄絃に大きな影響を与えてくださいました。

先生もまた、カヤグムの絃をとて大切にしていって、切れるまで、絃を張り替えることはありませんでした。

先生の音は、一つ一つが意味のある言葉のようで深く呼吸をしていて、音楽がいつも揚々としていました。

●カヤグム散調（民俗音楽）

カヤグム散調には、いくつかの流派がありますが、私が、演奏しているのは、咸洞庭月流（崔玉三散調が母体の流派）のカヤグム散調です。

咸洞庭月先生は、『チュムチュムンカヤッコ（舞うカヤグム弾き）』という伝説本になり、その本がドラマ化されたくらいのカヤグムの名手でした。

その先生の噂は、カヤグムを習い初めた頃に当時のサルプリの人間文化財、金淑子先生、李梅芳先生が共に口を揃えて、咸洞庭月のカヤグムが一番凄いと、言うことを耳にして以来ずっと気になる存在でした。

晩年、演奏家としては、あまり恵まれなかった（演奏会が少ない）先生のカヤグムを芸術の殿堂でビデオ

で聞いた時には、弄絃の音の深さに涙が止まりませんでした。

この流派の散調は崔玉三という男のカヤグム奏者から伝授されたものなので、とても男性的で、手の大きくゴツイ私には、とても合ってませんが、日々の研鑽無くしては、最後まで弾きこねせないため、この流派のカヤグム奏者は、日々指と手の筋力が衰えないように、筋トレをする人が少なくないと、いいます。

私は、1990年代に、咸洞庭月先生に弟子入りすべく、韓国に行きましたが、当時既に人間文化財にやっとな指定された先生は、不幸な時代が長かったせいなのか、人間不信のため、他人を寄せつけず、私はとうとう会うことすら出来ませんでした。

今年の春に、日本民藝館柳宗悦邸でのソコ公演を終えました。私がカヤグムと歩んだ日々を振り返ると、いつも思いは咸洞庭月先生にあり、その音色に近づきたい一心で修練を続けてきました。

いま、30年目にしてようやく本当にカヤグムが、私の心の友になり、信頼関係を結び、私を支え助けてくれるのを実感しています。

（チャン・リヒャン）

\*1.. 左手で作ります、音程と独特のビブラート

\*2.. 長時間演奏の散調（約1時間）

\*3.. 李王職というのは、植民地朝鮮時代に日本の宮内省の下に置かれた李王家の家務を司った機関。

写真は佐々木敏晴氏

# 「螢の宴」 水眠亭と串川の風流に遊ぶ

山崎史朗

水眠亭は江戸末期の文化文政時代に建てられた約180年前の農家で、半ば廢屋と化したその場所を改造し、東洋と西洋の文化が融合した新たな空間として再現しました。

水眠亭は丹沢山塊の西麓に位置する。傍を流れる串川は、主脈の北端焼山の東方にある柏原を源流とし、道志川と中津川間の旧津久井町域に狭長な流域を持つ約1.3キロの相模川の支流である。私がこの場所を選んだ理由は、この串川にあったと云っても過言ではない。そして予想通り、いやそれ以上に、この川は様々な表情を現出してくれた。川を舞台にしたその空間は四季の変容をドラマティックに演出する劇場と化したのである。私は先ず、その為に景を閉ざして



いた障子を取り外して大正期の格子の硝子戸に替え、劇場の扉を開けた。すると古びた硝子戸越しに見える景色が不思議と艶かしく歪んでみえた。この硝子戸は、対立する我と彼とを結ぶ詩のヴェールの様に思えた。

季節は緑深き青梅雨の午下であった。私は漱んだ眼裏までも洗い流してくるような清冽な清水に手を浸して須臾もとどまることをしらない自然の流れに身を委ねていた。

人間は物質的な豊かさを獲得せんがため、又饒済性をより重視するあまり自然の蚕食を続けてきた。しかしその源である生命の尊厳と心を失ってしまつては、すべての秩序は成り立たない。川は刻々と流転している。そして川そのものが生物以上に栄枯盛衰していることを決して忘れてはならないと思う。

日影が柔らかな触手を赤く滲ませる頃、森の奥まで透き通るような河鹿蛙の音が瀬音のリズムにのつて聞こえてくる。串川にもそろそろ螢の舞う季節が訪れようとしている。

「螢火の触れて心音乱れけり」 史朗

まだ梅雨冷のする6

月22日水眠亭にて「螢の宴」と銘打つて、韓国伝統舞踊家 趙寿玉さんの「僧舞」と言葉語り権座の「鉄輪」とそれに手打ち蕎麦と料理の会が催された。当日は梅雨半ばであり生憎の雨模様であったが、大勢の参加者を迎えて、手打ちの蕎麦と料理とお酒で梅雨寒の冷えた身体も程良く暖まつた頃には雨も上がり川の傍に設えた竹の舞台での趙寿玉氏の「僧舞」が演じられた。先ず私は清楚ながらも洗礼された美しい衣裳に目を奪われた。又その踊りからは、日本の能と相通じるような静謐な動きと、抑制されたなかに研ぎすまされた精神性が感じられた。後で判つたことであるが、李起昇氏の「能を大成した観阿弥は渡来人秦氏の子孫である。観阿弥の子の世阿弥は能の極意である「風姿花伝」を著した。こうしたことからは能は、古代の朝鮮半島から伝わった舞踊が日本的に発展完成したものだということもできるだろう」という言葉に接して納得した次第である。

「水亭の造化の神と会ひにけり」 史朗

趙寿玉氏の踊りは自然を凌駕するでもなく自然に溶け込んで一体化するでもなく毅然とした人間の尊厳を表現した舞であるように思えた。人は自然の一部であるとも云えようが、しかし自然はどのように簡単に同化

できる物でもない。人は自然に敬意を払いつつ寄りそっていくという思いを抱きながら人としての誇りを持つて処して行かねばと思う。真青な若竹で設えた舞台での趙寿玉氏の舞は真にその思いを具現化しているような錯覚さえ感じられた。

私事で恐縮ですが、私は現在、万華鏡なるものに執心して、この二年殆その制作に没頭している。それならば、何処にもないオリジナルの万華鏡を作ろうと、玩具のイメージが強い万華鏡を幻妙鏡と名付け、あえて一線を画している。それは人の目を惑わすまぼろしのよう

で又いうにいわれぬほどに美しいことを言う。それから幻妙鏡の進化した作品を「空華」と名付けた。「空華」とは仏教用語で「眼病の人が空中に花が咲いていると自誤ることから、迷える人が実体のない物を実体があるかのように見ることのたとえにいう」無理じいのように思えるかもしれないが、趙寿玉氏の舞は私の制作している幻妙鏡と相通じる物を感じている。まさにまぼろしのように実体があるようで実体がなく李起昇氏の云われるように、この世とあの世、あるいは夢の世を繋ぐ鏡の間であり、それはいうにいわれぬほどに巧みで美しくなければならぬと思う。

最後に私心を云わせてもらえば、私



は俳句という詩に出会って、季語・季節を大切に感じれば感じるほど、自然や伝統的な生活技術に対しても謙虚でありたいと考えるようになった。そして今、過去へ自然に即して生きた人間の営みを静かに振り返った時に、何かしら物質文明から解放された、深い精神性に裏付けられた人間の未来が見えてくるような気がしてならないのである。

「雨意とけて淡き螢の夜となりぬ」 史朗

(やまぎさき・しろう) 写真は佐々木敏晴氏

# 対馬を巡る旅―朝鮮通信使と済州島の海女を探して―

田中 景

二〇一四年三月に対馬を訪れた。九州と朝鮮半島の間の玄界灘に細長く横たわる日本の国境の島。福岡を離陸して三〇分後にはもう対馬に着陸していた。タラップで空港に降り立つと、明るい日差しと暖かい風に出迎えられる。厚手のジャケットの中でこわばっていた肩や背中が溶けるように緩む。ふと彼方に目をやると、山々が陽光を受けて幾重もの濃淡の緑色に連なっているのが見える。対馬は海に囲まれ、山に覆われ、農地に乏しい島である。飛び立ってきた九州は二〇〇キロ南の彼方。しかし、北を向けばわずか五〇キロ先は釜山で、対馬は日本よりも韓国にずっと近い。

このような地理的条件から、対馬と朝鮮半島との間には古来よりひとの移動が見られた。例えば、中世から近世にかけて対馬島民の多くが朝鮮半島へ渡り、漁業や私貿易をしていた。その中には窮乏から食糧などの略奪行為に及ぶ者も少なくなく、倭寇と称された。また十五世紀以降、対馬と釜山を拠点に朝鮮通信使が往来し、対馬藩は朝鮮と貿易を行った。空港から市バスで島の中心地である厳原へ向う。宿泊のホテルをチェーンクインした後、対馬藩主宗家の居城跡と菩提寺の万松院を散策する。万松院の裏の松林の山に敷かれた石段を上って行くと、代々の対馬藩主の墓所がある。多くの墓石には、傍ら

に藩主の朝鮮通信使外交の功績を記す説明書きが添えられている。

対馬藩は、十五世紀には朝鮮王朝政府より倭寇の取締りと引き換えに米の供給や朝鮮との貿易を保障されていたが、豊臣秀吉の朝鮮侵略によつて関係が途絶えてしまった。その後、徳川幕府が開かれると朝鮮王朝政府は朝鮮人捕虜の返還を求め、幕府に交渉するよう対馬藩に要請した。これをきっかけに日朝関係が再開し、朝鮮王朝政府は徳川家の慶事の折に通信使を遣わした。一行は漢陽から釜山を経由して対馬に寄港し、海路と陸路を利用して江戸へ向った。対馬藩は通信使の招聘、随行、通訳を含め江戸幕府との外交を仲介した。併せて対馬藩は釜山に草梁倭館を建てて貿易を行い、主に日本の銅や錫と朝鮮の木綿や人参、米を輸出入して藩の財政を潤した。

今日、朝鮮通信使を軸とする日韓関係史は島の観光や市民交流の促進に生かされている。厳原の至るところで、通信使の上陸や逗留を記念する史跡が目に残る。市行政主導の夏の厳原祭りでは釜山の市民を招いて朝鮮通信使のパレードを再現し、日韓の芸術家たちが集う音楽や芸術の祭典を開催している。また、釜山港と比田勝港を結ぶフェリーが就航し、毎週大勢の観光客が韓国から島を訪れている。さらに対馬と釜山の両市が連携して朝鮮通信使を世界記

憶遺産にしようとの動きもある。

そんな対馬の「表の歴史」の一方で、記述されることも語られることもほとんどないもう一つのひとの往来が近代以降の対馬にあった。済州島の海女たちの移民である。済州島は火山島で耕作地が乏しく、島民は古くから漁業を生業とし、女性もまた海女として働いた。済州島から対馬へのひとの移動は、日本による朝鮮の植民地化以降、本格化した。日本から漁民、潜水器業者、水産加工



業者が済州島に流入し、漁業と水産業を独占した。海女たちは朝鮮総督府の管理のもとに操業の自由を失い、日本人水産業者の安価な労働力となった結果、より商品価値の高い漁獲物を求めて朝鮮半島や日本に出稼ぎに出た。特に対馬は済州島から近く、豊かな漁場があるために移民が多かった。戦後、一九四八年の済州島四・三事件や朝鮮戦争の勃発から、さらに多くの済州島民が生き延びるために故郷を離れた。一九五〇

年代、対馬に住む朝鮮系住民は朝鮮半島出身者を含め約六〇〇〇人にのぼった。海女たちは漁獲物の漁期に応じて島の至るところへ出かけて行き、潜水器をかついで長時間海に潜るコンプレッサー漁をしながら年中休むことなく働いた。コンプレッサー漁は、高収入だが過酷かつ危険で、多くの海女が潜水病にかかり、命を落とす者もいた。やがて、夫が従事するイカ漁の不漁や日本人漁業者との軋轢、さらに子どもの教育や就職など

の理由から、海女たちは対馬を離れ、下関や大阪などの都市に移住した。その結果、二十世紀末には対馬に住む済州島の海女はわずか六人にまで減少した。

翌日、レンタカーで厳原から上対馬町方面へ北上し、鰐浦から島の東部へと巡る。大浦、豊、鰐浦、泉、比田勝、琴、芦浦、済州島出身の人々は、かつてこれらの漁村に暮らし、女性たちはアワビやサザエ、ウニ、ワカメ漁に従事していた。海は今も水面を陽光に照らされてゆらめき、水底まで青く透き通って穏やかなまななのに、そこにはもはや海女の姿はない。さらに海岸線を南下し、芦見という漁村を探し求める。やはり済州島の出身で海女として働きながら家族を支えたオモニのいらつしやる趙寿玉先生は、ここで生まれた。芦見と書かれたバス停の側に車を止め、トタン張りの古い小さな家屋の集まる村へと歩いていくと、女性たちが地面に竿を立てて縄を張ったところにワカメを干している。その景色に、ふと小さな寿玉先生を連れたオモニの幻影が見えるような気がする。

三日目、厳原の旧城下町を散策する。休憩に入った小さな喫茶店で郷土料理の対馬そばを注文する。店は料理を作る五十歳くらいの女性一人きりで、そばの付け合わせにタラの芽やごごみのてんぷらを揚げてくれた。私がレンタカーで対馬を旅していると話かけると、女性は美津島町の海辺の出身で、子どもの頃は道路が整備されてなかったのどこへ



行くにも船に乗って出かけたこと、友達とよく海に潜って遊んだことなど、気さくに話してくれる。

「対馬には海女さんが大勢いたそうですね。」私は思い切って訊いてみた。

「子どもの頃、家の近所に韓国人の海女のおばさんがおつてね。アワビだのウニだの、獲れたものをいつもたくさんくれたの。」女性は懐かしそうに答えた。

わくわくするような、ほっとするような思いが胸に込み上がる。濟州島の海女たちがここに生きていた――その事実が、この女性の記憶に書き留められていた。

(たなか・けい)

李善愛『海を越える濟州島の海女』の資源をめぐる女のたたかい』、明石書店、二〇〇一年を参照。  
写真は昔見の海辺、筆者撮影

# 年老いた幼稚園生

小泉洋子

私が韓国舞踊に憧れたのはテレビで「ファン・ジニ」のドラマを見た時からです。

二年間の闘病生活で夫が他界してしまつた後、ぽっかり穴が空いてしまい、そんな時息子にインターネットで韓国舞踊を教えてくれるところが近くにないか調べてもらつたら、目と鼻の先に趙寿玉チュムパンの教室があり、早速入れていただくことになりました。

ところが高度な伝統舞踊にとても私の老体ではついてゆけず、辞めようと思つた時、郵便局で林鮮玉さんに出会い、「私が教えてあげるから続けなさい」と優しく声をかけてくださり、その言葉に甘えて今日まで何とか続けることが出来ました。

初めは初級クラスと一緒に、皆さん上手な人達ばかりで何が何だか訳も分らず必死でついていくだけでしたが、ゆつたりコースが出来て、趙富子さんにきめ細かく指導してもらい、少しずつ理解出来るようになりました。

今は趙寿玉先生に「やくざの仁義みたい」だとか、林鮮玉さんに「犬がおしっこしているみたい」だとか、趙富子さんに「くにやくにやしないの！」等、叱咤激励されながら頑張っています。

チュムパンの方たちは優しい人達ばかりで八十歳を迎える私を大切に労わってくくださり、夜は手をつないで家の近くまで送ってくれたり、皆さん笑顔で声をかけてくれるので、参加出来た喜びに「このまま踊りながら死んで行けたら最高!!」なんて呟きながら一日一日を大切に生きております。

今後ともどうぞ年老いた幼稚園生をよろしくお願ひいたします。

(こいずみ・ようこ、ゆつたりコース)

## 活動報告

◎2013年11月22日(金)  
**韓国文化院 定期公演シリーズ**  
**Kカルチャーの魅力 趙寿玉舞踊公演**  
 東京・新宿 韓国文化院 ハンマダンホールにて  
 主催:駐日韓国大使館 韓国文化院

◎2013年12月8日(日)  
**趙寿玉チュムパン おさらい会**  
 東京・新宿区 榎町地域センターにて 主催:趙寿玉

◎2014年3月7日(金)  
**ハウスコンサート・ライブ**  
 主催:韓国 ソウル ユルハウス

◎2014年5月22日(日)  
**倉田洋二さんの個展**  
 東京・銀座 ギャラリー悠玄 主催:ギャラリー悠玄

◎2014年6月22日(日)  
**蛍の宴 水眠亭と串川の風流に遊ぶ**  
 神奈川県相模原市 水眠亭  
 主催:SAI企画 国井芳子  
 協力:椿座/佐藤省(ギャラリー悠玄)

◎2014年7月2日(水)  
**オペラ「春香」 全4幕 日本語上演**  
 横浜 みなとみらいホール(大ホール)  
 主催:2014オペラ「春香」上演実行委員会  
 共催:2014東アジア文化都市実行委員会

◎2014年7月12日(土)  
**One Day Festival 2014 in Tokyo**  
 東京・新宿 R's Art Court(労音大久保会館)  
 主催:One Day Festival 東京実行委員会

## 活動予定

◎2014年8月15~17日(金~日)  
**金美善先生のワークショップに参加**  
 韓国・コチャン 農楽伝授館

◎2014年10月28日(火) 19:00開演  
**宮崎節子 韓国舞踊ソロリサイタル**  
 東京・杉並 杉並公会堂 小ホール 後援:趙寿玉チュムパンの会

◎2014年10月29日(水) 17:00開演  
**日韓交流音楽会 海を渡る笛の風**  
 東京・北区 北トピア ツツジホール 主催:北トピア